

特集論文

初任者研修プログラムの授業科目の カリキュラム・デザインとその成果

The Design and Effect on the Curriculum of Training Program of Novice Teachers

宮橋 小百合

MIYAHASHI Sayuri

(和歌山大学大学院教育学研究科
教職開発専攻)

須佐 宏

SUSA Hiroshi

(和歌山大学大学院教育学研究科
教職開発専攻)

豊田 充崇

TOYODA Michitaka

(和歌山大学大学院教育学研究科
教職開発専攻)

谷尻 治

TANIJIRI Osamu

(和歌山大学大学院教育学研究科
教職開発専攻)

抄録：和歌山大学教職大学院の実施する「教職大学院と連動した初任者研修プログラム」は大学周辺の小・中学校に勤務する10名の初任教員を受け入れている。その研修形態は、校内での実地研修と大学内での講義・演習とをジョイントさせたものとなっており、特に学内講義のカリキュラム設定に特色がある。教育委員会が実施する研修と比較しながら、教職大学院による初任者教員向け講義・演習のカリキュラムの設計・実践内容・成果等をまとめた。この結果、初任者の授業実践力向上のプロセスなどが明らかになり、当カリキュラムの有用性が認められた。

キーワード：初任者研修プログラム、研修カリキュラム、授業実践力、授業改善、和歌山大学教職大学院

1. はじめに

和歌山大学教職大学院（以下教職大学院）が実施する「初任者研修プログラム」は、大学近隣に勤務する初任教員10名を対象におこなっており、月に2回程度、教職大学院授業実践力向上コースが開講する講義の受講を課している。（初任者研修プログラムの詳細については別途、前出の特集論文を参照）

本稿では、初任教員が教職大学院にて受講する授業のカリキュラム開発及びその実施状況や成果の抽出に焦点を当て、初任者の学級経営力及び授業実践力への影響やその成長プロセス等について論述する。

2. 初任者研修プログラムの概要

和歌山大学教職大学院における初任者研修プログラムに参加する初任教員10名は、和歌山市が初任者研修を実施している木曜日に、教職大学院の授業（授業実践力向上コース）を受講している。開講頻度は月に1、2回であり、受講した科目は教職大学院の単位と

して認定される。

平成28年度に初任者研修のための科目として木曜日に開講したのは、「学校・学級経営Ⅰ」、「授業・教

表1 受講する初任者の属性

A	V 小学校2年生担任	新卒	女
B	V 小学校4年生担任	中学校講師経験あり	男
C	W 小学校2年生担任	講師経験あり	男
D	W 小学校4年生担任	新卒	女
E	X 小学校2年生担任	新卒	男
F	X 小学校4年生担任	講師経験あり	女
G	Y 中学校2年生副担任 (数学科)	講師経験あり	男
H	Y 中学校3年生副担任 (社会科)	講師経験あり	男
I	Z 中学校2年生副担任 (数学科)	特別支援学級での 講師経験あり	女
J	Z 中学校3年生担任 (国語科)	講師経験あり	男

材研究Ⅰ」、「授業・教材研究Ⅱ」、「授業・教材研究Ⅲ」の4科目8単位であった。

これらの科目は、和歌山市の初任者研修の日程に合わせて実施しているため、日によって9:10から19:40までと長時間開講する日もあれば、16:40から19:40までの数時間みの開講の日もある（表4参照）。

3. 通常の初任者研修との相違点

通常、和歌山市で行われている初任者研修と本学で実施している初任者研修との大きな違いは、カンファレンスの持ち方にあると言える。本学で行っている初任者研修のカンファレンスでは、大学教員と拠点校指導教員が連携して指導にあたっている。和歌山市の場合、初任者の指導を担当する拠点校指導教員は、初任者が2名配置されている学校に籍を置き、拠点校以外の学校で初任者が1名ずつ配置されている学校2校の初任者指導も担当している。よって、拠点校以外の学校に配置されている初任者は、1週間のうち1日だけ拠点校指導教員の指導を受けることになる。また、初任者が2名配置されている学校であっても、基本的にはそれぞれ1日ずつ拠点校指導教員の指導を受けることになっている。

一方、本学で行っている初任者研修の場合、毎週月曜日に大学教員が訪問し、拠点校指導教員と一緒に2名の初任者の授業を参観する。参観後は、放課後のカンファレンスまでの時間に大学教員と拠点校指導教員が指導内容について打ち合わせの時間をとっている。初任者の日常の様子を知る拠点校指導教員と1週間開けて授業を参観する大学教員が情報交換しながら授業を振り返ることで、初任者の実態に応じた指導を大学教員の専門性を活かしながら行えるようにしている。

初任者にとっては、今、必要としていることについて、複数の視点から指導を得られるメリットがある。また、小学校においては、時間割の調整によって初任者同士も互いの授業を参観してカンファレンスに参加できるため、互いの実践を相互評価することもできる。視点を共有している拠点校指導教員が大学教員の指導内容を踏まえて日々の初任者指導をしていることも初任者の成長を促進していると考えている。

さらに、本学で行っている訪問指導では、基本的に担当校を決めて教員が訪問しているが、各初任者配置校を巡回指導する教員も置いており、加えて各大学教員の専門性を活かした指導ができるように、学期に数回、大学教員の訪問校をローテーションしての指導も行っている。

もうひとつ大きく違うのは、教職大学院で行っている授業形式である。和歌山市で行っている初任者研修も研修内容は多岐にわたっており、十分な研修が行わ

れているが、各分野の専門家を招いての研修となるため、各研修の関連性を保つことが難しい。一方、本学で行っている大学の授業は、基本的に大学教員によるチーム・ティーチングで行っているため、主担当以外の教員も何らかの形で研修に関わっている。よって、研修全体の関連性も考慮しやすく、年間を通じて一体感のある研修を受けられることも大きなメリットである。

4. 授業科目のデザインと実施状況

本稿では、初任者プログラムの開講科目のうち、初任者研修プログラムで訪問指導に関わっている大学教員が全員担当している科目である、「授業・教材研究Ⅰ」、「授業・教材研究Ⅱ」、「授業・教材研究Ⅲ」の3つの科目のカリキュラムに焦点をあて、そのデザインと成果について論じることとする。なお、校長経験者である特任教授の3名については、シラバス上は授業担当者ではないが、授業補助としてボランティアでほぼ毎回授業に参加しており、専門性の必要に応じて示範授業を担当したり、受講生の模擬授業後の協議に参加している。

4.1. 授業・教材研究Ⅰ

この科目は、5月30日から7月29日までのクォーターⅡの期間において開講された。授業の流れは表4の通りである。

表の左列にある「シラバス授業計画」は、昨年度の認可申請の段階で計画されたシラバスである。このシラバスに準拠しつつ、受講生の様子や教員のリソースを考慮して配列し直したのが、表中央の「実際の授業内容」である。表の右列「シラバス位置づけ」は、「実際の授業内容」とシラバスで計画したどの回が対応しているのかを表している。

科目の到達目標は、①すぐれた授業について、その指導技術、授業改善の知識を習得する、②授業実践におけるPDCAサイクルを理解し、授業改善の知識を習得する、③現任校における自らの授業の改善案が計画できる、の3点であった。

この到達目標を踏まえつつ、実質5月の連休明けから本格的に開始された訪問指導において見えてきた初任者の課題である「予定した授業構成が実行できない」、「授業規律が子どもに浸透させられず授業に集中できない」等について考慮しながら科目をデザインしていった。

この科目では、授業担当者である実務家教員による示範授業を3回実施している。それにより「すぐれた授業」ではどのような指導技術が使われているのか、また「すぐれた授業」の裏にどのような準備が行われているのか、「すぐれた授業」を受けた後の協議を通

して自らの授業と比較してどうであったのか、という視点の獲得が目指されている。

第1回目の示範授業(6月2日)では、小学校教諭であった実務家教員が、小学校6年生社会科の歴史の授業を実施した。この授業を受けた結果、初任者たちの協議では、「導入には興味を引くような仕掛けが必要であること」、「子どもを褒めることで学習規律を保つこと」、「視覚的な理解を促すため板書を活用すること」、「1時間の授業を構成するためには、多大な準備が必要であること」等について発表された(図1)。



図1 示範授業後の協議結果を発表(写真のグループでは、協議の結果をまとめた模造紙には、「興味」「地図帳」「視覚」「板書」「導入」「教科書の細かい説明」「豆知識」「まとめ」といったカテゴリーが並び、最終的に示範授業を1文字で表すと「褒める」であると発表された。)

第2回目の示範授業(6月16日)では、小学校教諭経験があり、和歌山市教育委員会の指導主事として交流派遣されている実務家教員が、小学校3年生国語科の授業を実施した(図2)。この授業を受けた結果、初任者たちは各々で「導入。子どもが早く授業を受けたいようになるように!」、「絵(写真)をたくさん取り入れる」、「生徒からの意見をまとめみんなに伝える」、「教具を使った授業を行う」、「実物教材を用意する」、「自分の考えをもつ時間の確保」、「文章をしっかりと見つめる」等の明日からの授業づくりの目標として設定した。

また、この科目全体を通して、PDCAサイクルを理解し実際に自らの授業にPDCAを適用していくための授業分析の視点の獲得を目指している。例えば6月16日の3、4回目の回では実際に、各初任者が実施した特定の1時間の授業を想起しながら、自らの計画と実行について書き起こし、グループで共有した。そして計画段階と実行段階における個人の課題と共通する課題を見出し、短期的・長期的の両スパンから今後の改善案を考える活動を行った。表2に示した、中学校の初任者グループの話し合いでは、ある初任者が毎時間行っている板書計画についてまとめた「板書ノー

ト」を他のメンバーに示し、自分が行っている計画段階での工夫を伝えたことによって、他の初任者も実施したいと発言し、短期的スパンの個人の課題に「板書ノートを作る」と挙げられた。

表2 初任者たちが自身の授業づくりの課題への振り返りをまとめた模造紙の事例

	計画段階		実行段階	
	短期的	長期的	短期的	長期的
個人的	板書ノートを作る。マシントラブルを防ぐ。	子どもが食いつく教材づくり。班づくりの工夫。	教具の活用。導入の改善。	個別対応。(低学力の生徒への支援)
共通の	学習指導要領を見る。めあてのタイミング。山場づくり。	出てくる解答を予想しておく。学習形態を使い分ける。子どもが食いつく発問づくり。	授業の振り返り。まとめ方の工夫。	子どもの意見のマネジメント能力。(吸い上げ→集約→発展)

また、全員に共通する課題であり、長期的に実践していきたいものとして、「子どもの意見のマネジメント能力」が挙げられている。この課題は、ある初任者から提案され、教科は異なるが同じような課題を持つと他のメンバーも口々に同意してまとめられた。授業中に子どもから出た様々な意見や発言を教師が吸い上げ、集約し、そこから本時のねらいに沿って授業を発展させていくという流れは、初任者メンバーが授業の「よい展開の仕方」だと共通認識を持ち、全員共通の課題として取り上げているのである。

この回以外にも、自らの授業を振り返る機会が2回設定されている。

4.2. 授業・教材研究Ⅱ

この科目は、8月29日から10月28日までのクォーターⅢの期間において開講された。シラバスにおける科目の到達目標は、①単元学習について正確な知識を獲得する、②子どもの実態に即した単元目標の設定と指導案の作成ができる、③教材についての正確な知識を習得する、④教材研究のスキルと教材を活用した授業計画を立てることができる、の4点である。

この到達目標を踏まえつつ、初任者の課題や学校現場の実情に沿って授業をデザインした(表4)。例えば、本プログラムに参加する初任者のうち2名が中学校数学科の教員であること、また小学校教諭が6名であり算数指導も課題であることから、第3、4回目の授業では数学の専門性をもつ実務家教員が算数の示範授業を行った。また、第5、6回目の授業では、この科目

の到達目標とは少しずれるが、小学校・中学校とも2学期は運動会のように大きな学校行事が行われることを踏まえて、学校行事を生かした授業づくり・学級づくりを扱った。

授業最終日での振り返りシートで、10名の初任者たちが「クォーターⅢの授業を通して、学んだことで、実践に活かしていること（活かしていこうと心掛けていること）」として、次のような点を挙げている。（表3）

一番多かった記述は、【教材研究のやり方】に関するものだった。「教材研究では子どもたちのつきたい力・疑問・楽しい・つまずきを前より意識しています」、「学習指導要領を前より読むように」、「教材を見つめることを大切にしよう」と意識→はじめから指導書に頼らない、「子どものつまずくポイントを予測して教材研究を行う」といった記述で、9つあった。

次に多かったのは、【単元】に関するものであった。「単元をつらぬく計画の立案（領域をまたいだ学習計画）」、「単元を見通した授業づくり」、「単元を通して一つの授業に望むよう心がけています」といった記述で、5つあった。

【めあての意識と提示】についても、「子どもの姿を大切に（めあての設定や課題への取り組み方）」、「めあて、振り返りを大切に」、「めあての提示の仕方（藤本先生）」といった記述が3つあった。

【導入】についても、「ICTの利用を積極的に！導入の短時間化」、「国語授業（意図的指名、板書、導入）」、「導入の工夫（子どもの疑問を引き出すような導入）」といった記述が3つあった。

【個人思考の時間の確保】については、「個人思考の場を確保するようになった」、「個人思考→少人数で→グループで→全体で」、「思考時間の確保」といった記述が3つあった。

【行事を通した学級指導】についての記述は、「行事指導（実行委員会、スローガン、価値づけ）」、「運動会を成功させる為に（学級作り）」の2つであった。

【意図的指名】についての記述は、「国語授業（意図的指名、板書、導入）」、「意図的指名を効果的に」の2つであった。

【授業スタイル】については、算数の示範授業を実施してくれた実務家教員の提唱する授業スタイルについて、「個人思考→少人数で→グループで→全体で」、「一番活かしているのは藤本先生の授業です。常に自分のスタイルをはやく持ちたいなと思っています。」という記述の2つであった。

他にも、「活用する場を重視するようになった」、「まとめと振り返りの一致」、「まとまった板書」といった記述もあった。

この振り返りを見ると、科目の到達目標である上述の4点において、初任者たちが意識的に取り組めると推察される。

表3 クォーターⅢの授業を通しての振り返り

カテゴリー	表出回数
教材研究のやり方	9
単元を貫く計画の立案	5
個人思考の時間の確保	3
めあての意識と提示	3
導入	3
行事を通した学級指導	2
意図的指名	2
授業スタイル	2

4.3. 授業・教材研究Ⅲ

この科目は、12月8日から2月2日の4日間で、クォーターⅣの期間に開講された。この授業のシラバスにおける科目の到達目標は、①子どもの実態を踏まえた学習指導案を、各教科のねらいに即して立案できる。②授業分析や授業改善の方法を理解し、次の改善策や課題を提示できる。③全学年を通した教科書の単元構成と付きたい力との関係を理解し、小学校6年、中学校3年を見通したカリキュラム・デザインが理解できる、の3点である。

この到達目標を踏まえつつ、この授業も初任者の課題や学校現場の実情に沿って授業をデザインした（表6）。例えば、「教科書研究①～④」はシラバスの通りに後半に固めるのではなく、適宜分けて開講することで、講義形式のみの授業になることを避けつつ、教科書執筆経験者や採択にかかわる行政担当経験者という実務家教員の人的リソースを用いて、教科書を最大限活用するための基本的知識の習得を目指している。また、理科教育の示範授業を実施することで、小学校教諭6名の理科の授業における実験の意義について実践的理解を深めつつ、中学校教諭たちには実物教材を提示することの意義として理解を促した。

同様に、プログラミング教育についての指導も科目内に組み込んでいる。小学校で必須化される予定のプログラミング教育について概要を理解し、実際に体験的に学習することで、小学校教諭の初任者たちは授業づくりのアイデアを得ていた。一方で、中学校教諭である4名は直接的にプログラミング教育に関わる機会は今後少ないかもしれないが、彼らが指導する生徒たちはそのような教育を受けて中学校に進学してくるという視点、あるいは中学校でも活用できるアプリや教材があるかもしれないという視点で積極的にアプリ活用を体験し、受講していた。

ここまでの授業デザインの流れと同じように、この「授業・教材研究Ⅲ」でも、理科の示範授業やプログラミング教育など、受講内容の一部が特定の分野に偏っているのだが、初任者たちは意欲的にそこから学び取ろうとしている様子がうかがえる。その例として、12月22日に実施された初任者Hによる中学校社会科

の模擬授業とその検討会の後に各自が書いた振り返りシートには、その様子が表れている。初任者Hの模擬授業を受けて、例えば数学科の初任者Iは「授業準備にかかる時間をもっと増やすこと、この刺激をうけて教材研究にはげみたいと思います。」と記述している。同じ数学科のGは「教材研究、下準備を十分にとっているからこそその生徒からの質問の返しであったり、導入の入り込みやすさにつながっているのだと改めて感じました。導入から展開へ入っていくことのスムーズさを自分でも身につけることが出来たらと思います。本当に自然に本題に入るので非常に参考になりました。」と記述しており、自らの課題に引き寄せて模擬授業を分析していることがわかる。また小学校教諭のDも「H先生のようなユーモアのある導入ができるようになりたいです。いつも課題としています。身近なものを扱った社会科で、子どもたちが実感を伴った学びを得られるので、3学期の社会科、もっともっとがんばりたいです。(都道府県や和歌山について)」と記述し、初任者Hの模擬授業から自らの課題を見つめなおしている様子がうかがえた。

5. 初任者の成長とその成果

5.1. 示範授業からの学び

第一に、示範授業から得た学習成果を示すものとして、分かりやすいのが、授業デザインと板書の変化であった。

例えば、「授業・教材研究Ⅰ」の第2回目の示範授業では、小学校3年生の国語「すがたを変える大豆」(光村図書)の授業が実施された。示範授業を実施した実務家教員は、図2に示すように、③にある図を使用して導入を行い、②のように本文を拡大コピーしたものを並び替えるよう児童役の受講生に指示した。導入で使用された③の絵も黒板下に登場順に並べられていった。そして、本文の各段落の冒頭にある接続詞に注目していくよう授業を展開させた。授業終末のまとめとして、①にあるように、本文全体を「はじめ」「中(事例)」「おわり」に分け、説明文の構造を理解させた。

示範授業を受けて、明日の授業から「絵(写真)をたくさん取り入れる」と目標を設定したある初任者Aは、6月27日の訪問指導時の国語の授業「お話を楽



図2 第2回目の示範授業の板書

しもう いなばの白うさぎ」(光村図書)でお話を聞いて挿絵を並び替えるという授業を実施している(図3)。

用意したワークシートには、本文を写した文章の段落が順不同で並べられており、示範授業時に配布されたものと似ていて、その影響が見て取れる。図3の③に示したように、板書にも示範授業のように用意されている。「絵(写真)をたくさん取り入れる」という設定目標は達成しているが、「絵(写真)」を授業に取り入れる意図への理解は、「表面的」なものに留まっている。

また、教科書にある単元のねらいは「お話を楽しもう」だったため、授業のねらいと展開内容に齟齬が生じる結果となってしまった。訪問指導でもその点について指摘された。



図3 いなばのしろうさぎの板書写真

その後、初任者Aは9月の授業で同じように教科書本文を並び替える授業をデザインした。今度は、示範授業と同様に説明文の単元で、本文の内容を理解させることを目的とした授業であった(図4)。図2で示した示範授業の板書と同様に、本文の拡大コピーを黒板に貼り(②)、子どもの意見を聞きながら並び変える授業展開だった。並び替えながら、段落ごとに文頭の言葉や接続詞に注目させていた。授業後のカンファレンスでも、示範授業を参考にデザインしたということであった。この回の授業では、授業のねらいと本文の並び替えという手段が一致しており、児童も一生懸命順番について思考する姿が見られた。

この初任者Aに見られるように、自らの授業の板書には示範授業のような「絵や写真」が少ないと気づき、「絵(写真)をたくさん取り入れる」という目標を立て、実行に移しているのがわかる。当初は、「絵(写真)」、「本文の並び替え」といった授業技術そのもの



図4 ある初任者の9月の板書

を取り入れるという、表面的な理解に留まっていたが、訪問指導によって指摘を受けることで、示範授業の「授業のねらい(めあて)」やそれに即した技術としての「絵(写真)」の使用、本文コピーの使用、並び替えという手段の選択といったことが有機的につながっていると理解を深め、図4に見られる授業づくりに至っている。

このような初任者Aの進歩は、「授業・教材研究Ⅰ」で意図した①すぐれた授業について、その指導技術、授業改善の知識を習得する、③現任校における自らの授業の改善案が計画できる、という到達目標が達成されていることを示していると言えよう。

また、数学科の初任者2名は、数学の専門性をもつ実務家教員の指導や示範授業を受けて、その授業スタイルである「個人思考→少人数で思考→グループで思考→全体思考」を踏襲した授業づくりを行っている。他の初任者たちもそれぞれ、示範授業から多くの刺激を受け、その指導技術や知識を学びとっているように見える。

また、実務家教員が示範授業の中で、細かい点を褒めながら授業を進めていく様子を見学生徒役として体験することで、初任者の多くは授業中に見学生徒を褒めるタイミングや褒め方を習得し、自らの授業で実践している様子であった。

5.2. 模擬授業の実施とその後の授業改善

「授業・教材研究Ⅱ」の第9、10回目(10月7日)で模擬授業を実施した初任者Cは、模擬授業での協議により、(1)意図的指名の活用、(2)めあてとまとめの一致、(3)板書の改善の3点について課題を設定し、10月19日に自身の学級での授業に臨んだ。

図5と図6に見られるように、板書の写真を比較してみると、板書は模擬授業時よりも構造化されていることがわかる。模擬授業時には、図5の②で示したように、子どもから出てきた意見を本文のコピーを貼って示すだけで、それ以外の意見を板書することは少なかった(図5の④)。しかし実際の授業では図6の④にあるように、子どもの意見がたくさん板書され、子どもの意見を生かした授業づくり・単元づくりを意識できていることがうかがえる。

初任者Cによる「10月6日模擬授業協議会から出た反省を受けて」という文章では、課題(1)意図的指名の活用について、「模擬授業では全ての発言を意図的指名により流そうと考えていた。すると、子どもと目を合わす時間をあまり取ることができなかつたり、予想していたことと違う発言をしたとき、うまく対応が出来なかつたりした。そこで、本時では、大まかに子どもの考えを頭に入れておき、必要に応じて、指名することにした。N君の『かたつむりくんのセリフ』に対する意見や、Tさんの『どうしてお手紙の内容がってしまったのか』という疑問など、出てきてほしいと

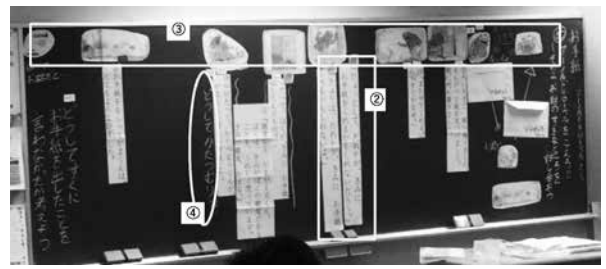


図5 模擬授業時の板書

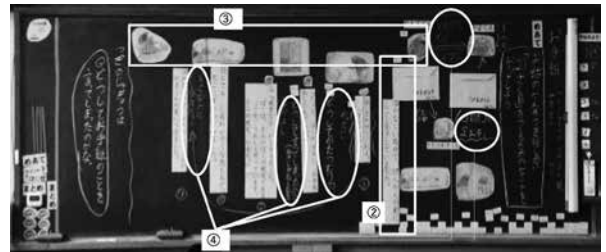


図6 実際の授業後の板書

教師が考えていたことを出してほしい時に、意図的に指名することができた。」と述べている。この記述から、模擬授業時には事前に各自のワークシートに書かれた内容を把握し、意図的指名を試みていた段階から、ワークシートに書かれた内容を「大まかに」把握するに留め、実際出てきた発表に対応しながら、「出てきてほしい」タイミングで意図的指名をすることで、授業の流れに生かせるよう意識したことが読み取れる。

また課題(2)めあてとまとめの一致については、「(学級で実施した授業でも)『めあて』と『まとめ』が繋がっていない板書になってしまった。目標は『初発の感想を交流することで、話の大筋が分かり、今後の学習課題を見つけることが出来る』であった。話の大筋も分かったし、学習課題も見つけることが出来た。『目標』と『めあて』をどう繋げるか、その『めあて』と『まとめ』はどう繋げるか、まだまだ改善しなければいけないと感じた。」と述べている。この記述から、「話の大筋も分かったし、学習課題も見つけることが出来た。」とあるように、一部は狙ったように改善できていたが、「『目標』と『めあて』をどう繋げるか、その『めあて』と『まとめ』はどう繋げるか」という今回でも改善できなかった点を次の課題として設定して追究している様子が見受けられる。

課題(3)板書の改善については、「(模擬授業後の)反省では、①授業が終わった時に『子どもが今日の授業で何を学んだか』わかる板書、②子どもの意見を入れた板書、を作ることが大事だと指摘いただいた。①については、流れが分かるが、『めあて』と『まとめ』が繋がっていない板書になってしまったと考える。②は模擬授業の時よりは少し子どもの意見を書けたので、改善できたと考える。」と述べている。この記述から、授業の流れがわかる板書にはできたが、課題(2)と関連して「めあて」と「まとめ」のつながりをもた

せることが難しかったため、その部分が板書にも生かせなかったと認識していることがわかる。

このように、初任者Cは模擬授業の実施に際して自らの課題を設定し、その課題を解決するために意識的に模擬授業を実施し、そこでの協議内容から多くを得て、現任教での授業に臨んでいる様子が見える。

5.3. 他校種・他教科から得る学びの発見

上述した授業・教材研究Ⅲでの初任者Hによる中学校社会科の模擬授業後の振り返りに見られたように、本プログラムに参加する初任者10名は、小学校と中学校の差、および専門とする教科も3種類あり、実施した示範授業や模擬授業は、受講者に直接関係しない教科や分野である場合もあった。しかし、授業担当者たちによる検討方法の工夫といった努力もあり、総じて受講者たちは意欲的に取り組んでいる様子であった。このように、他校種・他教科の授業をもとに学習することで、初任者Iの「授業準備にかかる時間をもっと増やすこと、この刺激をうけて教材研究にはげみたいと思います。」や、初任者Gの「教材研究、下準備を十分にとっているからこそその生徒からの質問の返しであったり、導入の入り込みやすさにつながっているのだと改めて感じました。」というコメントに見られるように、教材研究や授業準備のような授業づくりに必要な要素に焦点を当てて自分への振り返りとする姿勢を獲得していると考えられる。このような姿勢は、「専門的な学習共同体」(Wiseman et al., 2013)の土台となる文化を形成しうるものとも言えよう。受講生たちがそのような姿勢を獲得し、学校種や教科を超えて学び合うことに意義を見出せるようになることで、より学び合いを促進する文化的な基盤を形成していけるのではないだろうか。実際、彼らは学校種を跨いだ自主的な学習サークルを形成して、お互いに部分的な模擬授業を実施して検討し合うことを始めている。まだ萌芽的ではあるが、彼らが今後学び合いを重視する文化を体現しながら実践していく可能性が見られる。

6. 今後の課題と展望

本論で取り上げてきた科目群は、本来教職大学院の「授業実践力向上コース」に設定されているものであり、本年度は当コースの5名の院生が受講しており、初任者教員10名と合わせて15名となる。しかしながら、このコースの5名は初任者の勤務する各学校へ「インターンシップ実習」として毎週月曜日に訪問し、実習をおこなっており、お互いの面識は深いといえる。

但し、院生と正式に採用されている初任者教員との

差があるため、初任者に特化できない科目設定上の課題もある。例えば、表2で見たような、自らの授業実践の課題を分析するというデザインで実施した時間は、初任者がワークシートを記入している間に院生を別室に集めて「初任者に見られる課題の特徴」というミニ講義を実施して分析視点を提供し、初任者たちが各グループで課題を発表し合う場にそれぞれ配置し、初任者の発言から課題の特徴について分析するという全く異なる作業を並行して実施した。毎日授業を行っている初任者と、まだ「インターンシップ実習」でも授業を担当させてもらっていない院生との差を考慮しての授業デザインであった。初任者だけの受講であれば、より具体的に日々の授業づくりや学級経営に直結した内容を扱える可能性がある点を考えると、院生と同じ科目を履修することの難しさが存在している。

また、前述の3でも「研修全体の関連性も考慮しやすく、年間を通じて一体感のある研修を受けられることも大きなメリットである」と述べた。千々布(2016)も各自治体での行政研修が訪問研修を多く取り入れるようになっており、その理由として「教師の日常実践から遊離している」行政研修は、「多くの教員がその有効性を感じにくかったり成果を感じにくかったりするところがある」と指摘しているが、この授業内容を検討するミーティングでも、なるべく初任者の課題や日常実践を考慮しつつデザインしている。しかし、その内容は教職大学院のスタッフという人的リソースによって決定されることが多く、受講生の教員免許状の種類によっては今後対応しきれない場合もでてくると考えられる。そして、授業内容を検討・評価する場には、学校現場や拠点校指導教員との連携はないため、指導にズレが生じていないかどうかを検証することが難しい。全ての授業担当者が訪問指導に関わっていることから、今後は学校現場や拠点校指導教員の意見も参考にしつつカリキュラムをデザインしていくことも検討していきたい。

引用資料

- Wiseman, P., Arroyo, H. and Richter, N. (2013) Reviving professional learning communities : Strength through diversity, conflict, teamwork, and structure. R&L publishers.
- 千々布敏弥(2016)「現職教員を対象とする行政研修プログラムの改革」木原俊行・寺嶋浩介・島田希編著『教育工学的アプローチによる教師教育～学び続ける教師を育てる支える～』、第7章、pp.123-141.

参考資料

- 木原俊行(2004)『授業研究と教師の成長』日本文教出版。

表4 授業・教材研究Ⅰの概要と流れ

【授業・教材研究Ⅰ】クォーターⅡ

担当者：豊田・宮橋・谷尻・深澤・須佐・中山
(藤本・坂本・西浦)

◎授業の到達目標及びテーマ

- ①すぐれた授業について、その指導技術、授業改善の知識を習得する。
- ②授業実践におけるPDCAサイクルを理解し、授業改善の知識を習得する。
- ③現任校における自らの授業の改善案が計画できる。

●授業の概要

児童生徒の成長・発達と創造的な学力を保障する授業実践におけるすぐれた指導技術を遂行するために、授業設計の方法、授業展開の方法、授業分析の方法、授業改善の方法を理解し、高度な授業実践の計画的・組織的な実践力を培う。

		シラバス授業計画	実際の授業内容	シラバス位置づけ	
6/2 16:30	①	授業の構造①	深澤 谷尻 全員 すぐれた授業とは。示範授業（教員による模擬授業）を行う。その後、示範授業を分析し、すぐれた授業に隠れた技術や理念を学ぶ。	授業の構造①	
	②	授業の構造②		模擬授業・検討会①	
6/16 9:10	③	すぐれた授業とは①	宮橋 豊田 全員 授業実践におけるPDCAサイクルについて学ぶ。さらに、「すぐれた授業」の条件等を考え、今後の授業づくりにいかす手立てを考える。	授業の構造②	
	④	すぐれた授業とは②		すぐれた授業とは①	
	⑤	すぐれた授業とは③	須佐 谷尻 全員 すぐれた授業とは。示範授業（教員による模擬授業）を行う。示範授業を分析すると共に、自らの授業を振り返り、どこをどのように改善すれば良いかを具体的に検討する。	すぐれた授業とは②	
	⑥	板書計画①		模擬授業・検討会②	
	⑦	板書計画②	中山 深澤 全員 学習指導案の細案とは。評価基準や規準、教材観など基本的な事項を再確認する。実際の授業を想定して、板書計画を立てる。（授業教材研究を含む）	指導案作成①	
	⑧	班・グループ活動① (作業・活動)		板書計画①	
	7/7 9:10	⑨	班・グループ活動② (話し合い)	谷尻 深澤 全員 班やグループの活動をいかした授業について理論と実践を学んだ後、自らの授業でグループ活動をいかした授業をどのように展開するのかを具体的に検討する。	班・グループ活動① (作業・活動)
		⑩	指導案作成① (個別学習・指導)		班・グループ活動① (話し合い)
⑪		模擬授業・検討会①	豊田 須佐 全員 ICTを使った授業の示範授業を行う。示範授業を分析すると共に、ICTをいかした授業をどのように作り展開するのか、自らの直近の授業で具体的に検討する。	すぐれた授業とは③	
⑫		指導案作成② (個別学習・指導)		模擬授業・検討会③	
16:50		⑬	模擬授業・検討会②	中山 宮橋 全員 受講生の代表による模擬授業。その後、授業分析を行い、改善案を検討する。次週の授業を想定して、教材研究と指導案作成も行い、改善に努める。	模擬授業・検討会④
		※			指導案作成②
7/28 13:10	⑭	模擬授業・検討会③	宮橋 全員 受講生の代表による模擬授業。その後、授業分析を行い、改善案を検討する。	指導案作成③	
	⑮	指導案作成③ (個別学習・指導)		須佐 全員 1学期の振り返りを行い各自の課題を明確にする。2学期の板書計画等準備をする。	板書計画②

★学生に対する評価：「授業の到達目標及びテーマ」について、以下の成果で評価を行う。

- ①は指導案の完成度により評価する。
- ②は授業分析の妥当性・緻密性により評価する。
- ③は授業実践・授業改善のパフォーマンスにより評価する。

表5 授業・教材研究Ⅱの概要と流れ

【授業・教材研究Ⅱ】クォーターⅢ

担当者：豊田・宮橋・谷尻・深澤・須佐・中山
(藤本・坂本・西浦)

◎授業の到達目標及びテーマ

- ①単元学習について正確な知識を獲得する。
- ②子どもの実態に即した単元目標の設定と指導案の作成ができる。
- ③教材についての正確な知識を習得する。
- ④教材研究のスキルと教材を活用した授業計画を立てることができる。

●授業の概要

学校における現代的な教育課題や育てる児童生徒像に照らした学習指導における単元構想と教材研究に関する理論および方法・技能を習得し、その理論や技能等を用いた効果的な授業デザインができることを目標とする。また、自らが設定した実践課題や実習に即した素材・教材の検討を行い、その成果を活かした単元計画・学習指導案をまとめることを通して、教材開発・授業設計を行う能力を培う。

	シラバス授業計画	実際の授業内容	シラバス位置づけ
9/8 9:10	① 単元とは何か	中山[宮橋][全員] 単元とは何か。単元計画の構想、そして具体的な作成にあたり、どのような配慮が必要かなどを考える。その上で、単元構想を立てる。(10/7に続く)	単元とは何か
	② 単元研究① (個別学習・指導)		単元研究①
	③ 単元研究② (個別学習・指導)	藤本[須佐] 算数の示範授業と算数の授業づくりを具体的に学ぶ。それをふまえ、どのようにして深く広がりのある教材研究をするのか、具体的に考える。	単元研究②
	④ 単元研究③ (個別学習・指導)		教材とは何か
	⑤ 単元研究④ (個別学習・指導)	谷尻[深澤][豊田][全員] 2学期の授業づくりと学級づくりはどのように進めれば良いかを、小学校・中学校、それぞれの視点から考える。	教材研究①
	⑥ 単元構想と指導案発表と検討会①		教材の活用と検討会①
9/29 16:30	⑦ 単元構想と指導案発表と検討会②	須佐[全員] どのようにして深く広がりのある教材研究をするのか。(須佐式教材研究)	教材研究②
	⑧ 単元構想と指導案発表と検討会③	深澤[全員] どのようにして深く広がりのある教材研究をするのか。(深澤式教材研究)	教材研究③
10/7 16:30	⑨ 教材とは何か	宮橋[中山][全員] 受講生の代表による模擬授業。その後、授業分析を行い、単元構想を含めた改善案を検討する。	単元構想と指導案と検討会①
	⑩ 教材研究① (個別学習・指導)		単元構想と指導案発表と検討会②
10/20 9:10	⑪ 教材研究② (個別学習・指導)	谷尻[全員] 総合的な学習の時間の単元構想の立て方を考える。実際にグループで考えた構想を発表し、課題と改善案を考える。	単元研究③
	⑫ 教材研究③ (個別学習・指導)		単元構想と指導案発表と検討会③
	⑬ 教材の活用と検討会①	豊田[全員] 受講生の代表による ICT を使った模擬授業。その後、授業分析を行い改善案を検討。さらに、ICT教育の先進例と今後の課題を学ぶ。	教材の活用と検討会②
	⑭ 教材の活用と検討会②		教材の活用と検討会③
	⑮ 教材の活用と検討会③	宮橋[須佐][全員] 海外の授業を取り上げ、日本の授業を相対化し、その長所や課題を考える。クォーターⅢのまとめを行い、各自の課題を明確にする。	単元研究④
	※		

★学生に対する評価：「授業の到達目標及びテーマ」について、以下の成果で評価を行う。

- ①②は単元構想図や単元指導計画フォーマット、学習指導案により評価する。
- ②③④は開発教材とその発表内容により評価する。

表6 授業・教材研究Ⅲの概要と流れ

【授業・教材研究Ⅲ】 クォーターⅣ

担当者：豊田・宮橋・谷尻・深澤・須佐・中山
(藤本・坂本・西浦)

◎授業の到達目標及びテーマ

- ①子どもの実態を踏まえた学習指導案を、各教科のねらいに即して立案できる。
- ②授業分析や授業改善の方法を理解し、次の改善策や課題を提示できる。
- ③全学年を通じた教科書の単元構成と付けたい力との関係を理解し、小学校6年、中学校3年を見通したカリキュラムデザインが理解できる。

●授業の概要

学校における児童生徒の実態を分析し、その状況に応じた学習指導における単元構想と教材研究に関する理論および方法・技能を習得し、その理論や技能等を用いた効果的な授業デザインができることを目標とする。また、全学年を通してその単元構成と児童生徒に付けさせたい力との関係を明らかにするとともに、数種類の教科書会社の教科書を比較検討することにより、子どもの実態に応じた授業づくり、教材開発・授業設計を行う能力を培う。

	シラバス授業計画	実際の授業内容	シラバス位置づけ
12/8 9:10	① 子どもの実態と授業	藤本 教科書はどのようにつくられているか。執筆者の意図や工夫について学ぶ。	教科書研究①
	② 発問と子どもの発言①	深澤 子どもの発言を引き出す発問とは？発言に対する応答とは？具体的な事例をもとに学ぶ。	発問と子どもの発言①
	③ 発問と子どもの発言②	谷尻 「子どもの実態」の分析とそれに基づいた単元研究と指導のあり方を学ぶ。	子どもの実態と授業
	④ 子どもの実態と単元研究①(個別学習・指導)	須佐 「子どもの実態」の分析とそれに基づいた個別学習のあり方を学ぶ。	子どもの実態と単元研究①
	⑤ 子どもの実態と単元研究②(個別学習・指導)	中山 深澤 理科教育における指導法(特に実験指導)を実技を通して演習する。その後、科学教育分野の指導のあり方について学ぶ。	子どもの実態と単元研究②
	⑥ 子どもの実態と単元研究③(個別学習・指導)	※藤戸台小学校の理科室に移動	教科書研究②
12/22 14:50 時間変更	⑦ 子どもの実態と単元研究④(個別学習・指導)	宮橋 全員 受講生の代表による模擬授業。「子どもの実態」を踏まえた指導のあり方を検討し深める。	子どもの実態と単元研究③
	⑧ 単元構想と指導案発表と検討会①		子どもの実態と単元研究④
1/19 9:10	⑨ 単元構想と指導案発表と検討会②	中山 教科書はどのように選ばれているか。教科書の違いを比べ、効果的な使用法を考える。	教科書研究③
	⑩ 単元構想と指導案発表と検討会③	豊田 プログラミング教育はどのように行われるのか。単元との関連に基づき、趣旨を理解する。	教科書研究④
	⑪ 教科書研究①(個別学習・指導)	須佐 深澤 宮橋 全員 3グループに分かれて、事前に指示されたテーマに基づいた指導案発表と検討会を行う。	単元構想と指導案発表と検討会①
	⑫ 教科書研究②(個別学習・指導)		単元構想と指導案発表と検討会②
	⑬ 教科書研究③(個別学習・指導)		単元構想と指導案発表と検討会③
	⑭ 教科書研究④(個別学習・指導)	谷尻 全員 受講生の代表による模擬授業。教科書研究などを含め、これまでの学習をいかした授業を行う。その後、授業分析をもち、改善案を検討。	発問と子どもの発言②
2/2 16:30	⑮ まとめ	豊田 全員 各自の課題研究の発表を行い、1年間の成果と課題を明らかにする。 ※院生は別途、実施する。 ※初任者についてもグループ別実施の可能性	まとめ
	※		

★学生に対する評価：「授業の到達目標及びテーマ」について、以下の成果で評価を行う。

- ①は子ども実態分析により評価する。
- ②は単元構想図や単元指導計画フォーマット、学習指導案改善内容により評価する。
- ③は指導案発表、検討会、教科書研究の内容により評価する。